

## 『淮南子』と『春秋』公羊傳

村 田 進

漢初において儒家と道家とはどのような影響関係が見られ、思想上どのような意義があるのか。このことは漢代思想史上の重要な問題である。武帝初年に献上された『淮南子』は道家色が濃いものの、儒家經典の引用が多く見られ、この問題を解くうえで、重要な資料となり得よう。今回は、『淮南子』中の『春秋』について考察を加えた。

『淮南子』中で、いわゆる『春秋』として用いられているのは十一例である。そのうちとりわけ注目に値するのは、主術訓に「専ら教道を行ひ、以て素王と成る。……善を采り醜きを鉏り、以て王道を成す」とあって、孔子素王説が見られることである。孔子素王説は、公羊學者の董仲舒らによって完成されたものとされ、同時期の『淮南子』主術訓に見えることは、漢初の思想界を窺ううえで大變興味深い。

このほか『春秋』観を示すものには、汎論訓に「詩・春秋は……皆衰世の造なり。……又た未だ詩・春秋を作らざるの時有り」とみえ、『春秋』は衰世の造作に過ぎず、普遍性のないことを主張している。これらによれば、『淮南子』は『春秋』と一定の距離感を保っているようである。

傳文についていえば、説林訓や泰族訓に、「春秋に曰く」「春秋之を大とす」として、公羊傳文の引用がなされ、公羊傳義が述べられている。たとえば泰族訓に「泓の戦、軍敗れ君獲らるるも、而れども春秋之を大とするは、其の列を成さざるに鼓せざるを取ればなり」とある。これはいわゆる宋襄の仁の故事だが、明らかに公羊傳の「君子は其の列を成さざるに鼓せざるを大とし、大事に臨みて大禮を忘れず」の一文に基づく。

このように、『淮南子』で『春秋』と明記して引用あるいは傳義を説く場合は、盡く公羊傳と關連がある。漢初の春秋學は「初め……春秋は公羊なるのみ」（『漢書』儒林傳論贊）とあるように、公羊傳に限られたが、『淮南子』にみえる『春秋』も同様なのである。

それでは、『淮南子』は公羊傳から思想的な影響を得ているであろうか。近年、孫紀文氏は、その著『淮南子研究』（學苑出版社、二〇〇五年）において、『淮南子』には公羊學の大一統思想や仁義・仁知思想の影響が見られるとされた。しかし、論據に乏しく、孫説には従い難い。次に一例を示そう。先に挙げた泰族訓の一文で、「春秋

之を大とす」として公羊傳を引用していた。しかし實はその後文で「方に言ふ所を指して、一概を取るのみ」といつており、「春秋之を大と」したことは物事の一端を取り上げたのみだと指摘して、むしろ泰族訓は公羊傳を批判的に取り上げているのである。

以上のように、『淮南子』編纂に公羊傳を學んだ者が關與したことは確實だが、儒家思想の影響が濃いとされる泰族訓で公羊傳が批判的に取り上げられるなど、思想的な影響關係はなさそうである。ただ、主術訓に孔子素王説が見られたことは、景帝時の博士董仲舒との關係で、非常に興味深いことである。今後さらに『淮南子』にみえる儒家經典を検討する必要があるであろう。

如上の内容について『淮南子』と『春秋』公羊傳の論題で、『學林』五三・五四號（松本幸男先生・島一先生追悼記念論集）、中國藝文研究會、二〇一一年一二月、一一六―一三一頁）に発表した。

（立命館大學文學部非常勤講師）